

亡妻追悼の一形態 ―日本挽歌「大野山」をめぐって―

小 西 里 沙

一 序

神亀五(七二八)年、大宰帥大伴旅人は、任地へ伴った妻を亡くした。着任後幾許も経ない、棟の花が散る頃であつた。旅人には亡妻挽歌一首があるが、それらは多く、三年の後、大宰府を離れる際に詠まれた。

旅人の亡妻挽歌とは別途に、妻の死の直後、神亀五年七月二十一日に、この妻の死を悼む壮大な作品が山上憶良に生まれた。旅人に献上された日本挽歌が、それである。

蓋聞 四生起滅方ニ夢皆空 三界漂流輪環不_レ息 所以
維摩大士在_二千方丈_一 有_レ懷_二染疾之患_一 釋迦能仁坐_二於
雙林_一 無_レ免_二泥洹之苦_一 故知 二聖至極不_レ能_レ拂_二力
負之辱至_一 三千世界誰能逃_二黑闇之搜索_一 二風競走而
度_レ目之鳥旦飛 四蛇争侵而過_レ隙之駒夕走 嗟乎痛哉
紅顏共_二三_一 素質与_二四德_一 永滅 何圖 偕老違_二於
要期_一 獨飛生_二於半路_一 蘭室屏風徒張 斷腸之哀弥痛 枕
頭明鏡空懸 染筠之淚遽落 泉門一掩 無_レ由_二再見_一 嗚

呼哀哉

愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無_レ結 從來厭_二離此穢土_一
本願託_二生彼淨刹_一

日本挽歌一首

大君の遠の朝廷と しらぬひ筑紫の国に 泣く子なす慕ひ来
まして 息だにもいまだ休めず 年月もいまだあらねば 心
ゆも思はぬ間に うち靡き臥やしぬれ 言はむすべ為むすべ
知らに 石木をも問ひ放け知らず 家ならばかたちはあらむ
を 恨めしき妹の命の 我れをばもいかにせよとか には鳥
のふたり並び居 語らひし心背きて 家離りいます

(五七九四)

反歌

家に行きていかにか我がせむ枕付く妻屋寂しく思はゆべしも
はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなさ

(七九五)

(七九六)

亡き後に旅人周辺で作られた作品と大野山との関わりを読み解くことで、探っていかうと思う。

二 「大野山」とうたう意味

大野山は、大宰府政庁の北にある現在の四王寺山といわれる。この山の名称については諸説あるが、現在最も支持を得ている論は、澤島久孝『萬葉集注釋』が採用した、本田義彦「此の城の山考」(『國語文』二〇巻一)である。本田氏は、精力的な実地調査と、緻密な歴史文献の調査から、大野山は、万葉集において「此の城の山」(5823)、「大城山」(8147、10297)と呼ばれているものと同じであることを指摘した。

氏の考えによりつつ、以下に山名を考える手掛かりとなる歴史資料の一部を年代順に挙げてみる。

1 秋八月、遣^レ達率答^レ妹春初^一、築^二城於長門國^一。遣^レ達率憶禮^一、福留^一、達率四比福夫於筑紫國^一、築^二大野及椽二城^一。

(日本書紀、天智四(六六五)年)

2 應^レ奉造^二四天王寺埵像四軀^一事 各高六尺

……宜^レ令^下大宰府、直^二新羅國^一高顯淨地、奉^レ造^二件^一像^一。
撰^レ却其災^上。

(類聚三代格、宝龜五(七七四)年)

3 ……大宰府司於^二城山四王院^一。軼^二讀金剛般若經三千卷^一。般若心經三万卷^一。以奉^レ謝^二神心^一消^二伏兵疫^一。

(日本三代実録、貞觀八(八六六)年二月十四日)

大野山についての最古の資料は、1の日本書紀天智四年の記事である。天智二年の白村江の戦いでの大敗により、防衛のために都府樓北の「大野」の地と、八キロ程南方の「椽」(現在の基山)の地に、山城が築かれたことが記されている。この「大野」という地名は、当時の大宰大監大伴百代に、

思はぬを思ふと言はば大野なる御笠の社の神し知らさむ

(4562)

という歌があり、旅人の時代に、大宰府の周辺に存在していたことが確認できる(百代については後述)。

2は、旅人や憶良の時代からおよそ四〇年後の宝龜五年に、大野山の山頂に「四天王寺」を置いた記事である。現在の四王寺山の呼称はこれ以降のものであり、旅人の時代には存在し得なかった。

3は、時代は下るが、1で造られた山城が山名となっている例である。この呼び方は、旅人の時代にも見られ、万葉集においても前述したように「此の城山」、「大城山」と、うたわれている。山頂部を六・五キロメートルにわたる土塁で囲み、造られたという、当時最大の山城は大宰府からもよく見えたはずである。加えて旅人の時代には、造営されてから既に長い年月を経ており、その存在が広く知られ、親しまれていたことが窺われる。それ故に、城(キ)なる呼び名が、一般的に用いられていたらしい。

以上、大野山に関する文献を見てきた。「大野」という地名は記されている。「大野山」の呼称は、日本挽歌以前には一度も用いられていない。万葉集でも「大野山」という名で歌に詠まれるのは、当該最終歌一首のみである。

次に、「城山」ではなく、あえて「大野山」という名を用いたことの意味を考えてみたい。万葉集で「大野」の語に注目すると、日本挽歌以前にも用例が見出せる。

① 天皇、宇智の野に遊獵したまふ時に、中皇命の間人連老をして献らしめたまふ歌

やすみしし我が大君の 朝には取り撫でたまひ 夕にはい寄り立たしし み執らしの梓の弓の 中頭の音すなり 朝狩に今立たすらし 夕狩に今立たすらし み執らしの梓の弓の中頭の音すなり (一三、雑歌)

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野

(四)

② けころもを時かたまけて出でましし宇陀の大野は思ほえむかも (二一九一、日並皇子舍人挽歌)

③ 輕皇子、安騎の野に宿ります時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌
やすみしし我が大君 高照らす日の御子 神ながら神さびせすと 太敷かす都を置きて こもりくの泊瀬の山は 真木立つ荒山道を 岩が根禁樹押しなべ 坂島の朝越えまして 玉かざる夕さり来れば み雪降る安騎の大野に 旅すすき小竹

を押しなべ 草枕旅宿りせず いにしへ思ひて(一四五、雑歌)

安騎の野に宿る旅人うち靡き寝も寝らめやもいにしへ思ふに (四六)

ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し (四七)

東の野にはかぎろひ立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ (四八)

日並皇子の命の馬並めてみ狩立たしし時は来向ふ (四九)

④ 柿本朝臣人麻呂、泊瀬部皇女と忍壁皇子とに献る歌一首并せて短歌

飛ぶ鳥明日香の川の 上つ瀬に生ふる玉藻は 下つ瀬に流れ触らばふ 玉藻なすか寄りかく寄り 靡かひし夫の命の たなづく柔肌すらを 剣大刀身に添へ寝ねば ぬばたまの夜床も荒るらむ そこ故に慰めかねて けだしくも逢ふやと思ひて 玉垂の越智の大野の 朝露に玉裳はひづち 夕霧に衣は濡れて 草枕旅寝かもある 逢はぬ君故 (二一九四、挽歌)
敗袴の袖交へし君玉垂の越智野過ぎ行くまたも逢はめやも (一九五)

右は、或本には「河島皇子を越智野に葬りし時に、泊瀬部皇女に献る歌なり」といふ。日本紀には「朱鳥の五年辛卯の秋の九月己巳の朔の丁丑に、浄大參皇子川島鸕鷀す」といふ。

①は、舒明天皇の狩に際して詠まれたものといわれる。反歌に「宇智の大野に馬並めて」と勇壮な狩の様子が表現されており、ここに「大野」が初めてうたわれる。

②は、日並皇子の死を舍人達が悼んだ挽歌群中の一首である。生前、狩に出かけた大野を通じて皇子を偲んでいる。「大野」を挽歌に初めて用いたのが、この歌である。

③は、亡き父を偲ぶ場として、②でうたわれた「大野」へとやってくる軽皇子の姿をうたう柿本人麻呂の作である。

④も人麻呂の作で、夫を葬った「越智の大野」を、夫を求めてさまよい歩く泊瀬部皇女の哀切な姿が表現されている。

柳田国男（国男の略称）が指摘するように、古代において、「野」は、丘陵地帯であり、現在のような平坦な場ではなかった。人里と山の間に広がる野は、葬送の場であつたらしく、例えば、

秋津野を人の懸くれば朝撒さし君が思はえて嘆きはやまず

（7-140五、挽歌）

といった野をうたう挽歌が多数存在する。野を挽歌の題材として用いた最初が、④である。

以上四例から、「大野」は亡き人を偲ぶ場や挽歌の素材としてうたわれてきたことが分かる。ついでにいえば、人麻呂の用例が多いことにも注目すべきであろう。

憶良が「大野山」という名を選択したのは、先行する人麻呂作品を踏まえ、「葬送の地」としての印象を際立たせる意図がある

ったのではないか。

さらに、このような挽歌、特に人麻呂作品との関わりは、「大野山」の「山」という語に注目してみると一層際立つ。亡妻挽歌として万葉集中最古の泣血哀慟歌と比較してみたい。

柿本朝臣人麻呂、妻死にし後に、泣血哀慟して作る歌二首
并せて短歌

1 天飛ぶや軽の道は 我妹子が里にしあれば ねもころに見ま
く欲しけど やまず行かば人目を多み 数多く行かば人知り
ぬべみ さね葛後も逢はむと 大船の思ひ頼みて 玉かざる
岩垣淵の 隠りのみ恋ひつつあるに 渡る日の暮れ行くがこ
と 照る月の雲隠ること 沖つ藻の靡きし妹は 黄葉の過ぎ
てい行くと 玉梓の使の言へば 梓弓音に聞きて 言はむす
べ為むすべ知らに 音のみを聞きてありえねば 我が恋ふる
千重の一重も 慰もる心もありやと 我妹子がやまず出で見
し 軽の市に我が立ち聞けば 玉たすき畝傍の山に 鳴く鳥
の声も聞こえず 玉梓の道行く人も ひとりだに似てし行か
ねば すべをなみ妹が名呼びて 袖ぞ振りつる （2-20七）
2 秋山の黄葉を茂み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも

（2-20八）

3 黄葉の散りゆくなへに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ

（2-20九）

4 うつせみと思ひし時に 取り持ちて我があたり見し 走出の

堤に立てる 楓の木のこちこちの枝の 春の葉の茂きがごとく 思へりし妹にはあれど 頼めりし子らにはあれど 世間を背きしえねば かぎるひの燃ゆる荒野に 白樺の天領巾隠り 鳥じもの朝立ちいまして 入日なす隠りにしかば 我妹子が形見に置ける みどり子の乞ひ泣くごとに 取り与ふる物しなければ 男じもの脇ばさみ持ち 我妹子とふたり我が寝し 枕付く妻屋のうちに 昼はもうらさび暮らし 夜はも思づき明かし 嘆けども為むすべ知らに 恋ふれども違ふよしをなみ 大鳥の羽がひの山に 我が恋ふる妹はいますと人の言へば岩根さくみて なづみ来しよけくもぞなき うつせみと思ひし妹が 玉かざるほのかにだにも 見えなく思へば (二一〇)

5 去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る

(二一一)

6 袈道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし

(二一二)

泣血哀協歌において、山は四度用いられている（傍線部）。これらの位置に注目してみると、そのいずれもが終末部にうたわわれていることに気が付く。

この山が最後にうたわれる形式は、古くは天智天皇挽歌に見られる。儀礼順に並んだ天智挽歌群のうち、山をうたうのは、終末部に位置する二首（石川夫人の「大山守」をうたう歌、額田王が御陵退散

の際に、墓所「鍛の山」をうたった歌）のみである。また、大伯皇女が弟大津皇子の死を悼んで作った人口に膾炙した挽歌群の終末部にも、弟を葬った二上山がうたわれる。（これらと同様に、泣血哀協歌の第二歌群終末部にうたわれている「羽がひの山」と「引手の山」もおそらく、妻が葬られた場所であろう。）

このような傾向は、葬送の最終段階である埋葬とも関わって非常に興味深いのだが、この問題については別に論を構えたい。

ここで注目したいのは、日本挽歌でも「山」は最終反歌のみに用いられており、泣血哀協歌の構造と酷似していることである。二作品間には、同じ句の使用など類似性が既に指摘されている（（石川夫人「大山守」の「山」は「大野山」の「山」と同じ句である。））。憶良の意識下に人麻呂の泣血哀協歌は深く沈み込んでいたようだ。彼は、日本挽歌をつくるにあたって、人麻呂の作品を踏まえ、意図的に「大野山」を終末部にうたったのではないか。

前述したように「大野」も、人麻呂の挽歌を踏まえた可能性が高い。憶良は、先行する作品の印象を投影しながら、妻を葬った絶えず心にかかる山として、「大野山」とうたって日本挽歌を閉じたのであろう。

次節では、この山と旅人亡妻追悼歌との関わりについて、考えてみたい。

三 追憶の宴

妻の死から二年を経た、天平三（七三〇）年正月十二日、大宰府の旅人邸で梅花の宴が催された。三三首の歌々が、大宰府の諸大夫や隣国の官人によってうたわれ、万葉集を代表する華やかな宴として巻五に記録されている。この宴から生まれた歌群については、古来様々な論じられているが、最も著名なものは、伊藤博「園梅の賦」（『古代和歌史研究4』）である。

山上憶良の作、八十八番歌「春さればまづ咲くやどの梅の花ひとりみつや春日暮らさむ」は、宴席の楽しさをうたう歌が並ぶ中で、一首のみ「ひとりみつや」と孤立した表現をとる。その表現が生まれた理由を、梅を好んだ亡妻を偲ぶ旅人の心を思いやつてのものであるとみた、というのが、伊藤氏の論の骨子である。

伊藤氏の論は、梅花の宴に初めて亡妻を偲ぶ心を読み取った卓見であり、本稿も氏の説に従いたいと思う。ただし、氏は旅人の歌には言及していない。

旅人の歌に続く大伴百代の歌には、日本挽歌でうたわれた大野山が登場する。旅人と百代の歌の中にも亡妻を偲ぶ心が読み取れるのではないかと本稿は考える。

1 正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へぬ

（百一五、大貳紀綱）

2 梅の花今咲けること散り過ぎず我が家の園にありこそぬかも

（八十六、少貳小野大夫）

3 梅の花咲きたる園の青柳はかつらにすべくなりにけらずや

（八十七、少貳粟田大夫）

4 春さればまづ咲くやどの梅の花ひとりみつや春日暮らさむ

（八十八、筑前国守山上大夫）

5 世の中は恋繁しゑやかくしあらば梅の花にもならましものを

（八十九、豊後守大伴大夫）

6 梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり

（九十二、筑後守葛井大夫）

7 青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし

（九十二、笠沙弥）

8 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

（九十二、主人）

● 9 梅の花散らくはいづくしかすがにこの城山に雪は降りつつ

（八十三、大監伴氏氏代）

梅花の宴の冒頭をかざる九首を右に挙げた。問題としたい歌は、8の旅人歌である。梅の花を天から降り来る雪に例えた、風雅で格調高い作品といわれる。一見すると、それ以外のものは読み取れないが、この歌に至る前の七首とは異なる点に注目したとき、旅人の格別な思いが見えてくる。

前の七首はすべて地上の景をうたっているのに対し、旅人の8だけが、「ひさかたの天より」と、急に天へ視線を放つ。この時、旅人は日本挽歌にうたわれたところの大野山を悲嘆の思いで振り

仰いだのではないか。

それを裏付けるように、続く百代は、「この城山に」と、近称「この」を用い、眼前の大野山をうたう。百代の歌は、「この城山に雪が降っていますね」と、まるで旅人の視線の所在を明らかにするかのうな歌いぶりである。

この大伴百代という人物は、詳しい系譜が不明であり、歌も七首しか残っていない。しかし、今の場合もう少し注目されて然るべき人物であるように思う。なぜならば百代と旅人との近しさが見られる重要な出来事があるからである。

大宰大監大伴宿禰百代ら、駅使に贈る歌二首

草枕旅行く君を愛しみたぐひてぞ来し志賀の浜辺を

(456六、大伴百代)

周防にある岩国山を越えむ日は手向けよくせよ荒しその道

(56七、少典山口忌寸若麻呂)

以前に天平の二年庚午の夏の六月に、帥大伴卿たちまちに瘡を脚に生し、枕席に疾み苦しむ。これによりて駅を馳せて上奏し、庶弟稲公、姪胡麻呂に遺言を語らまく欲りすと望み請ふ。右兵庫助大伴宿禰稲公、治部少丞大伴宿禰胡麻呂の兩人に勅して、駅を賜ひて發遣し、卿の病を省しめたまふ。しかるに数旬を経て幸く平復すること得たり。時に、稲公ら、病のすでに療えたるをもちて、府を發ちて京に上る。ここに、大監大伴宿禰百代、少典

山口忌寸若麻呂、また卿の男家持ら、駅使を相送りともに夷守の駅家に到り、いささかに飲みて別れを悲しび、すなはちこの歌を作る。

旅人が危篤の際に見舞った稲公たちを再び京に送る宴での歌である。年若い家持を伴って、一団の代表として百代が歌を詠んでいる。本来ならば、家持が務めるべき役目を代わって務めたのであろう。そのような役目を任されるからには、百代は、同族として旅人と近い関係にあり、一族の並々なぬ信頼を得ていたことが窺われる。

このような関係故に、百代は日頃から旅人が大野山に心を寄せていたことを知っていたのではないか。だからこそ、旅人の視線が大野山に向けられていることを即座に理解し、憶良と同じように、亡妻を偲ぶ旅人の心を思いやることができたのであろう。さらに、このやりとりを受け止めて、八三九番歌が詠まれる。

春の野に霧立ちわたり降る雪と人の見るまで梅の花散る

(583九、筑前目田氏真士)

この歌、三句以降は明らかに梅花宴における旅人の歌を意識しており、旅人への心遣いが窺われる。さらに、第二句「霧立ちわたり」は、日本挽歌最終反歌において繰り返し用いられる「霧立ちわたる」に通じる。同様の表現は他に一〇例あるが、その半数は七夕歌に用いられており、旅人の周辺でうたわれたものは、日本挽歌と八三九番歌の二首に限られる。

また、「春の野」という語に、「霞」は二例用いられるが、「霧」が組み合わされたのはこの一例のみである。契沖は、霧と霞が万葉集では区別されていないと指摘するが、新しい時代では、霞と霧の混同がほとんど見られず、「春霞」という固定した言葉も存在しているので、ここでの「霧」はことさらに選ばれた素材と考えられよう。

このように考えると、一首の表現は意図的に日本挽歌を踏まえた可能性が高い。この歌の作者は、「筑前目田氏真上」とあり、山上憶良の部下である。日本挽歌を目にする機会があったとしても何ら不思議ではない。百代の歌を聞き、日本挽歌を思い出したのだろうか。そして、旅人が大野山を見て嘆いていることに気が付き、自身も日本挽歌と旅人の歌を融合させる形で歌を詠み、旅人の気持に寄り添おうとしたのではないか。

風雅の宴のさなか旅人は一人妻を思っていた。そしてその心を知る人々は、大野山や日本挽歌を意識した歌を詠み、彼の心を慰めた。「大野山」に注目すると、このような「追憶の宴」としての姿が見えてくるような気がしてならない。

四 弔問歌の一手法

日本挽歌や梅花の宴ほど注目を集めていないが、旅人の妻の死を契機に生まれた贈答歌が、巻八の夏雑歌に収められている。

式部大輔石上堅魚朝臣が歌一首

ほととぎす来鳴き響もす卯の花の共にや来しと問はましものを
(一四七二)

右は、神亀五年戊辰に、大宰帥大伴卿が妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。その時に、勅使式部大輔石上朝臣堅魚を大宰府に遣はして、喪を弔ひ并せて物を賜ふ。その事すでに畢りて、駅使と府の諸卿大夫等と、ともに記夷の城に登りて望遊する日に、すなはちこの歌を作る。

大宰帥大伴卿が和ふる歌一首

橘の花散る里のほととぎす片恋しつつ鳴く日しぞ多き
(一四七三)

この贈答が交わされたのは、秋に贈られた日本挽歌以前の、ほととぎすが鳴く頃であった。この頃、旅人は自らうたったような悲嘆の中にあつたのであろう(五七九三)。

二首は、ほととぎす、卯の花、橘、という代表的な初夏の景物をうたったている。左注を考慮しなければ、一見単なる風流の作に見える。この二首、とりわけ石上堅魚の作に、挽歌の意味合いを読みとるべきなのかということは、古来様々な論じられてきた。

契沖(『萬葉代匠記』稍撰本)は、ほととぎすが「冥途より来る鳥」と見られていることから、堅魚の歌の「共にや来し」を、「(霍公鳥ハ卯花ニシタシキ鳥ナレハ、ナキ人ノ魂ト共ニヤコシ)」という意に捉え、挽歌の意味を持つ歌と解した。また、旅人の歌を、「橘ノ花ノ散ラハ、死セル妻ニヨソヘ、霍公鳥ノ鳴ラハ、ミツカラニ

譬フ。」とし、妻を亡くしての嘆き歌と解した。

契沖の説は、近代に至るまで多くの支持を得てきた。しかし、石上堅魚の歌について、井上通泰「万葉集新考」が、「元来旅人の妻の事をかけていへるにあらず。ただ子規の鳴くを聞き、子規ゾ啼クナル、モシ言ドフベクハ卯花ノサキシト共ニヤ来リシト問ハムモノヲといへるのみ」と説いて以来、金子元臣「萬葉集評釈」、澤瀉久孝「萬葉集注釈」も、単なる遊覧の作とする説を示している（旅人歌については、どの説も「妻への思いを読み取る」。

本稿は、二首は妻の死を背景とした弔問歌とそれに答えた嘆き歌であると考えている。ただし、諸説のようにな、ほととぎすに後代の和歌に多く見られる「冥途から来る鳥」の意味を結びつけ、それを主な根拠とするのはいささか短絡的に思える。

二首のいのちは「卯の花」から「橘」への詠みかえにあり、その意味と背景にある物を正確に読み取ってこそ、本来の姿が見えてくるのではないだろうか。⁽¹¹³⁾

まず、二首に共通してうたわれる「ほととぎす」と「卯の花」や「橘」が万葉集ではどのようにうたわれるのか、巻一〇夏雑歌、「鳥を詠む」の歌群から確認してみたい。

1 ますらをの出で立ち向ふ 故郷の神なび山に 明けくれば柘
のさ枝に 夕されば小松が末に 里人の聞き恋ふるまで 山
彦の相響むまで ほととぎす妻恋すらし さ夜中に鳴く

(一九三七)

2 旅にして妻恋すらしほととぎす神なび山にさ夜更けて鳴く

(一九三八)

右は古歌集の中に出づ。

3 ほととぎす汝が初声は我れにもが五月の玉に交へて貰かむ

(一九三九)

4 朝霞たなびく野辺にあしひきの山ほととぎすいつか来鳴かむ

(一九四〇)

5 朝霧の八重山越えて呼子鳥鳴きや汝が来るやどもあらなく

(一九四一)

6 ほととぎす鳴く声聞くや卯の花の咲き散る岡に葛引く娘女

(一九四二)

7 月夜よみ鳴くほととぎす見まく欲り我れ草取れり見む人もが

(一九四三)

8 藤波の散らまく惜しみほととぎす今城の岡を鳴きて越えゆな

(一九四四)

9 朝霧の八重山越えてほととぎす卯の花辺から鳴きて越え来ぬ

(一九四五)

10 木高くはかつて木植あじほととぎす来鳴き響めて恋まさらし

(一九四六)

11 逢ひかたき君に逢へる夜ほととぎす他時よりは今こそ鳴かめ

(一九四七)

12 木の暗の夕闇なるにほととぎすいづくを家と鳴き渡るらむ

(一九四八)

13 ほととぎす今朝の朝明に鳴きつるは君聞きけむか朝寐か寝けむ

(一九四九)

14 ほととぎす花橘の枝に居て鳴き響もせば花は散りつつ

(一九五〇)

当該歌群は、「神なび山」に鳴くほととぎすをうたう古歌に始まる。そして、4 からは、ほととぎすが次第に里へ近づいてくる様子がうたわれる。4 では、「山ほととぎす」が「野辺」に出てくるのを待つ。更に季節が深まり、8 と 9 では、岡や山を越えて遂にやって来たとうたわれる。それを境に「木植えじ」と庭で鳴くほととぎすの声を厭う 7 以降は、里でのほととぎすをうたっている。さらに、14 はほととぎすの姿を目にしての作である。

このように、ほととぎすは、山から里へと季節が深まるにつれ、飛び渡ってくる鳥だとされていたらしい。注目すべきは、「卯の花」と「橘」が詠み込まれる順である。「卯の花」は、歌群の冒頭部に、橘は終末部に詠まれている。万葉集においてこの順序が逆になる例は存在しない。

同じ初夏の花でありながら、このような区別が生じるのは何故なのか。続いて、卯の花と橘の違いを考えてみたい。これらは共に、巻一〇や大伴家持に用例が集中する新しい素材である。

まず、「卯の花」の特徴として挙げられるのは、

佐伯山卯の花持ちし愛しきが手をし取りてば花は散るとも

(七二五九、臨時)

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かずまた鳴かぬかも

(一九五三、夏籬)

……ほととぎす来鳴かむ月に いつしかも早くなりなむ 卯の花のにはへる山を よそのみも振り放け見つつ ……

(一九七九、大伴家持)

のように、野や山とともに詠まれる例が二四例中一一例と約半数を占めることである。また、

かくばかり雨の降らくにほととぎす卯の花山になほか鳴くらむ

(一九六三)

「卯の花山」という形でも二首にうたわれ、山に咲くものという考えが固定していたことが分かる。

では、「橘」はどうか。橘と共に用いられる表現として目立つのは、

我がやどの花橘のいつしかも玉に貫くべくその実なりなむ

(一九七九、大伴家持)

我がやどの花橘にほととぎす今こそ鳴かめ友に逢へる時

(一九八二、大伴家持)

など、一一例が、「わがやどの」という句と共に用いられることである。また、橘は、庭に人為的に植えるものとされていたらしく、「植う」という語と共に用いられる。

橘の林を植えむほととぎす常に冬まで棲みわたるがね

(10一九五八、夏雑歌)

ほととぎす来鳴き響めば草取らむ花橘をやどには植ゑずて

(19四一七三、大伴家持)

これらの特徴は、卯の花には見えない。橘は、卯の花とは対照的に山ではなく、里や庭に植えられるものであったようだ。このような違いがあるからこそ、ほととぎすの歌において、「卯の花」から「橘」へという順序が逆になることがないのであろう。

以上から、堅魚の「卯の花」と、旅人の答えた「橘」は、明らかに違うものとしてうたわれていることが分かる。卯の花は山にあり、そこからほととぎすが橘のある里へとやってくるのである。では、この違いを考慮したとき、堅魚と旅人の贈答歌はどんな意味を帯びてくるだろうか。

堅魚の歌は、「卯の花の共にや来しと問はましものを」と、願望をうたうものである。その背景には、卯の花はほととぎすと共に来ておらず、姿が見えないという現実があるのだろう。それは、卯の花は山に置き去りになってしまい、山を越えてやって来たほととぎすと共に来ることができないからではないか。「共にや来し」というと、日本挽歌で、

大君の遠の朝廷と しらぬひ筑紫の国に 泣く子なす慕ひ来

まして……

(七九四)

はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなさ

(七九六)

と表現された、旅人の亡妻が思い起こされる。この歌のほととぎすと卯の花は、旅人と妻に重なるように思えてならない。そうすると、卯の花が置き去りになっている山というのは、記夷城の北方に見える大野山ではないか。堅魚は、共に来たはずの妻は大野山に埋葬されてしまつてここにいないと、旅人の現状を表現したのであろう。

そのように考えると、「問はましものを」という表現にも、悲しみに暮れている旅人に対し、妻が亡くなった事情を聴くことなどできない、という思いやりが読み取れるように思う。

この弔問は、妻の死後、一、二箇月をようやく経た頃である。冒頭に述べたように、旅人は三年を経て、ようやく挽歌(すべて短歌である)をうたつた。この頃はまだ、挽歌という形で妻の死を表すことができなかったのではないか。その心に配慮して、季節の景物に託して、旅人の心を思いやつたのがこの歌であらう。

それに対し、旅人は「橘の花散る里」と答える。これは、堅魚の弔問に対して、ほととぎすは、卯の花だけでなく、橘とも一緒にいることができない、と妻を喪つての深い孤独を際立たせるものではないか。

妻は橘のある自宅にもおらず、妻と共にない悲しみは一時的なものではない。だから、私は「片恋」しつつ一人泣いているのだと答えたのであろう。このように、二首の背景に大野山と旅人邸を読み取ることで、より緊密なつながりが見えるように思う。

そして、この二首の直後に位置するのが、坂上郎女が「大城山」を偲んだ歌である。

大伴坂上郎女、筑紫の大城の山を偲ぶ歌一首

今もかも大城の山にほととぎす鳴き響むらむ我れなければども

(8一四七四)

この歌に歌われる大城山は、

いちしろくしぐれの雨は降らなくに大城の山は色づきにけり

(10二一九七)

大城といふものは筑紫の岡の郡を都の大野山の郡あり、片野大城といふ。

という作者未詳歌の脚注に説明されているように、大野山である。当該歌には、先の贈答に共通する点が多く見受けられる。「ほととぎす」は、二首に共通して用いられ、旅人になぞらえられている。さらに「鳴き響む」も、堅魚歌に似通っている。

旅人の異母妹である坂上郎女は、旅人の妻の死をきっかけに大宰府に赴いたといわれている。既に指摘のあることだが、彼女の唯一の挽歌「尼理願の死を悼む歌」(3四六〇)には、「泣く子なす慕ひ来まして」の句の使用など、日本挽歌の影響が色濃くみられる(小野ら1997)。坂上郎女の心には、旅人の妻の死に関わる記憶が深く刻まれていたのだろう。

そのように考えると、この二首と坂上郎女の大野山の歌が並んでいることが、偶然であるとは考え難い。

この歌は、澤瀉久孝『萬葉集注釈』が「筑紫追想の作である。」と指摘するように、先の二首と切り離して捉えることが一般的で

あった。しかし、賀茂真淵『萬葉考』のみが、「大伴郎女の身まかりしを大城の山に葬つらん、親族なればそを思なけきてよめる也」と、大野山と旅人の妻の死を結びつけた解釈を示している。

故人を葬った山を偲ぶ歌といえは、

うつそみの人にある我れや明日よりは二上山を弟背と我れ見

む (2一六五、大伴皇女)

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒くあらまくに

(210三、穂積皇子)

昔こそ外にも見しか我妹子が奥城と思へばはしき佐保山

(3四七四、大伴家持)

などの歌が思い起こされる。この坂上郎女の「大城山を偲ぶ歌」もまた、これらのような、山を通して故人を偲ぶ歌の系譜に属するのではない。先の二首との深い関わりを考えたとき、そのように思えてならない。坂上郎女は、堅魚と旅人の贈答の真意を知り、それを意識しながら「大野山」と旅人になぞらえられたほととぎすをうたったのではない。

以上のように考えてみると、直接うたわずとも、巻八の贈答歌の背景には、大野山が、はつきりと存在していることが窺われる。堅魚は、旅人と共にこの山を見やりながら、彼の尽きせぬ悲しみを思い、その心に寄り添おうと歌を詠みかけたのであろう。

万葉集に弔問歌は少ない。挽歌に分類されているのは、家持が母を失った智を慰めた歌(19四二四一六)のみである。

これとは違い堅魚歌は、死を想起させる事をうたわず、悲しみを慰めようと言葉尽くしたものではない。しかし、相手が最も心にかけている山を背景にしたこの歌は、ある意味でまぎれもなく弔問歌であつたように思える。初夏の景物に託しつつ、相手の悲しみを深く察した堅魚のうたい方は、美しく優しい弔問歌の一手法といえよう。

五 結

それにしても気になるのが、前節で挙げた、作者未詳の大野山をうたう歌である。先述したように、大野山をうたう歌は四首しか存在しない。そのうち三首については、すべて旅人亡妻と関わることを確認して来た。それに対して、この一首のみが、作者も成立事情もわからない。

しかし、この歌の「大城山」を説明するために、わざわざ脚注（大城山名、其後脚注参照）
大野山も大城山もがつけられていることは注目に値する。数多くの歌を成立事情も作者も語らず収める巻一〇において、脚注をもつ歌は唯一この一首のみである。何故このような異例の扱いがなされているのだろうか。

この脚注の、「謂」に始まり「者也」で終わる文体は、憶良の沈阿自哀文にのみ見られるものである。また、これに類似した文体で、東国の言葉や地名、愛着のあるものについて説明する自注が、家持にも多くみられる。

この脚注は、憶良や家持によって、旅人の妻が葬られ、追悼の思いを寄せる場となつた大野山の歌を、正確に伝えるために付けられたのではないか。

さらに、この歌に用いられている言葉や表現を調べてみると、旅人の周りの人物の作風に似通う点が非常に多く見受けられる。

まず、二句「しぐれの雨」に注目したい。この語は二三首に用いられており、巻一〇作者未詳歌群を除いた用例を示してみると、1しぐれの雨間なくし降れば御笠山木末あまねく色づきにけり

（8一五五三、大伴稻公）

2奈良山の嶺の黄葉取れば散るしぐれの雨し間なく降るらし

（8一五八五、大伴吉男）

3こもりくの泊瀬の山は色づきぬしぐれの雨は降りにけらしも

（8一五九三、坂上郎女）

4百船の泊つる対馬の浅茅山しぐれの雨にもみたひにけり

（16三六九七、道新羅使）

5……秋づけばしぐれの雨降り あしひきの山の木末は 紅に
にほひ散れども 楓のなれるその実は ひた照りにいや見が
欲しく……
（18四二一、大伴家持）

大伴稻公、坂上郎女、家持という、旅人と血縁のある人々が一様にこの語を用いていることが分かる。さらに、この二一九七番歌と同様に、「しぐれの雨」と「いろづきぬ」という語を合わせて用いているのは、大伴稻公と坂上郎女のみである。（注五）

とりわけ、「時雨の雨は」という表現は三首にしか用いられず、
二一九七番歌と3を除けば、

思はぬにしぐれの雨は降りたれど天雲晴れて月夜さやけし

(10 三三七、秋雜歌、月を詠む)

という歌にしか存在しない。しかし、この歌と二一九七番歌との
類似性は薄い。紅葉をうたう坂上郎女の子である3とより酷似し
ているといえよう。

また、初句「いちしろく」に注目した時も、同様のことが窺わ
れる。

(1) 青山を横ぎる雲のいちしろく我れと笑まして人に知らゆな

(4 六八八、坂上郎女)

(2) 天霧らし雪も降らぬかいちしろくこのいつ柴に降らまくを見

む

(8 一六四三、若松部朝臣君足

(3) 我がやどの秋萩の上に置く露のいちしろくしも我れ恋ひめや
も

(10 三三五)

(4) 吉隠の野木に降り覆ふ白雪のいちしろくしも恋ひむ我れかも

(10 三三九)

(5) さを鹿の小野の草伏いちしろく我がとはなく人に知られく

(10 三二六八)

(6) 臥いまろび恋ひは死ぬともいちしろく色には出でじ朝顔の花

(10 三二七四)

(7) うかねらふ跡見山雪のいちしろく恋ひば妹が名人知らむかも

(8) 道の辺のいちしの花のいちしろく人皆知りぬ我が恋妻は
(10 三三四六)

(11 二四八〇、柿本人麻呂歌集)

(9) 華人の名に負ふ夜声のいちしろく我が名は告りつ妻と頼ませ

(11 二四九七、柿本人麻呂歌集)

(10) 思ひ出でて音には泣くともいちしろく人の知るべく嘆かすな
ゆめ
(11 二六〇四)

(11) 隠り沼の下ゆは恋ひむいちしろく人の知るべく嘆させめや

(12 三〇二二)

(12) 隠り沼の下ゆ恋ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべ

く

(12 三〇三三)

(13) 旅にして妹を思ひ出でいちしろく人の知るべく嘆させむかも

(12 三三三三)

(14) さ丹つらふ君がみ言と玉梓の使も来ねば思ひ病む我が身

ひとつぞ ちはやぶる神にもな負はせ 占部据ゑ亀もな焼き

そ 恋ひしくに痛き我が身ぞ いちしろく身にしみ通り……

(16 三三二一)

(15) 隠沼の下ゆ恋ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべく

(17 三九三五、平群氏女郎)

(16) 杉の野にさ躍る雉鳴き響むいちしろく音にしも泣かむ隠り妻

かも

(19 四一四八、大伴家持)

柿本人麻呂歌集の二首が最も古い例であり、巻一〇から一二に

かけての作者未詳歌群の用例が目立つ。しかし、作者が分かるものに注目すると、伝未詳の若狭部朝臣君足を除いて、坂上郎女、大伴家持、家持の友人とされる平群氏女郎と、「しぐれの雨」と同様に大伴家の人々に集中する。

この語を知り、歌に用いることができる者は限られていたであろう。二一九七番歌と類似した歌を作る坂上郎女が、そのような言葉も用いていることに注目したい。

坂上郎女が、大城山を偲ぶ歌を残していることは、先述したこの作者未詳歌もまた、彼女によって、旅人の亡妻を思いながらうたわれたものでなかったかとさえ思われる。

そのように考えると、日本挽歌に始まる、万葉集における大野山をうたう歌がすべて、旅人の亡妻へとつながる。そして、そのいずれもが、旅人自身ではなく、彼に近しい人々によって詠まれている。旅人は、妻を亡くした悲しみのあまり、挽歌を詠むこともできず、ただ杳然と妻を葬った大野山を眺めるばかりであったのだろうか。

そのような旅人の心を、壮大な作品としてうたいあげたのが日本挽歌であった。日本挽歌に、「大野山」という語のみが、正訓字で記されたのは、旅人が心を寄せる、唯一無二の山であるという思いを込めたものであろう。

そして、その大野山は、旅人の心を思いやるものとして、百代や坂上郎女という、大宰府で旅人と共にあった人々によってうた

われていく。

こうして、近しい人々が夫に代わって、妻を葬った山をうたいながら、気持ちをお慰めしようとするという形は、泣血哀慟歌のような堂々たる亡妻挽歌とは性質が異なるが、悲しみが深いゆえの、もつとも切実な亡妻追悼の一形態であったとはいえまいか。

注

(1) 岡山県総社市にある山城「鬼ノ城」の土塁は、現在でもよく見える。江戸期には、「鬼の鉢巻」と呼ばれたほどである。

(2) 本稿とは別の観点から、旅人の歌に亡妻を偲ぶ思いを読み取る説として、大久保廣行「わが國に梅の花散る―発想の重層性をめぐって―」(『国文学論考』一〇号、都留文科大学国語国文学会)がある。

(3) この詠み換えに注目した論として、鉄野昌弘「橋の花散る里の雀公鳥」(『東京女子大学日本文学』八八号)があるが、本稿とは別の結論を得ている。

(4) このとき、石上堅魚と旅人の視線が大野山と旅人邸に向けられていたことは、「望遊」の場が「記夷の城」に設けられていることから想像できる。ここで、わざわざ十キロ離れた「記夷の城」が選ばれていることに意味があるのではないか。

この「望遊」という語は、万葉集に一例のみであるが、「望」の用例は二五例存在する。その一部を挙げる。

1 和銅三年庚戌の春の二月に、藤原宮より寧楽の宮に遷る時に、御興を長屋の原に停め、古郷を廻望^{ミマツル}て作らず歌

飛ぶ鳥明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかも

2 但馬皇女薨せし後に、穂積皇子、冬の日に雪の降るに御墓を

遥望し悲傷流涕して作らず歌一首

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒くあらまくに

(二〇三、穂積皇子、挽歌)

3

大和道は雲隠りたりしかれども我が振る袖をなめしと思ふな

右は、大宰帥大伴卿、大納言を兼任し、京に向ひて道に

上る。この日に、馬を水城に駐めて、府家を顧み望む。

……ここに、娘子、この別れの易きことを傷み、その会

ひの難きことを嘆き、涕を拭いて自ら袖を振る歌を吟ふ。

(六九六、遊行女婦)

以上に代表されるように、「望」は、墓所、故郷、家など愛

着のある場を望む場合に用いられることが多い。この時、二人

は妻の墓所である大野山と、旅人の自宅の両方を、記夷山から

望んでいたのではないか。大野山と旅人の里を背景にしたこの

贈答歌には、両者を見晴るかすことのできる「記夷山」という

場が不可欠であったように思える。

(5) 木下玉枝「巻十詠物抄」(万葉集を学ぶ第五集)に、「色づく」も、

大伴家の人々の使用が際立つという指摘がある。

(こにしりさ 岡山大学大学院社会文化科学研究科)

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅱ

愛知県立大学 説林(愛知県立大学国文学会) 五七

愛知淑徳大学国語国文(愛知淑徳大学国文学会) 三二

青山語文(青山学院大学日本文学会) 三九

霞(山崎勝昭) 十九、二十

跡見学園女子大学 人文フォーラム(跡見学園女子大学文学部人

文学科) 七

歌子(実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科) 十七

宇大國語論究(宇都宮大学国語教育学会) 二十

湖の本(秦 恒平) 四六、四七、四八

湖の本 エッセイ(秦 恒平) 一〇一

愛媛国文研究(愛媛国語国文学会・愛媛県高等学校教育研究会国

語部会) 五八

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 四一

王朝細流抄(安田女子大学大学院古代中世文学研究会) 十二

大阪大谷国文(大阪大谷大学日本語日本文学会) 三九

大阪大学 日本学報(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室)

二八

大妻女子大学紀要 ―文系―(大妻女子大学) 四一

大妻国文(大妻女子大学国文学会) 四十

岡山大学 国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 二三

香川大学国文研究(香川大学国文学会) 三三

學習院大學國語國文學會誌(學習院大學國語國文學會) 五二

學習院大学人文科学研究所報(學習院大学人文科学研究所) 二〇

〇八年度版